

説教『 幸いなる主の 』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 24章45節～51節

45 「主人がその家の使用人たちの上に立てて、時間どおり彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕は、いったいだれであろうか。46 主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。47 はっきり言うておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。48 しかし、それが悪い僕で、主人は遅いと思い、49 仲間を殴り始め、酒飲みどもと一緒に食べたり飲んだりしているとす。50 もしそうなら、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、51 彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ目に遭わせる。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

本日の聖書箇所、「忠実なと悪い僕」という譬え話は、「目を覚ましていなさい」（マタイ24:42、25:13）という主イエスの勧めに囲まれています。つまり、この譬え話においては、「目を覚ましてい

る」というのは、「いつも忠実で賢い僕として仕えている」ことであると、別の表現をもって説き明かされています。

終わりの時、主イエス・キリストが再び来られる時、私たちはどのような姿勢を取ったらよいのか、それは、忠実で賢い僕として生きることだと言うのです。そして具体的に、「時間どおりに家の使用人……周りの人・隣人！……に食事を与える」、そういう食事の給仕係（使徒言行録6:1-3）または管理者（マタイ24:47）になりなさい、命じられています。

しかし、「この一週間、終わりの時が近いと信じて、忠実で賢い僕になりきって生きるとは？ 自分は食事を他人に配る仕事にしているわけではないけれど」などと、この主イエスの譬え話が、今一つ現実の信仰生活の中に響いて来ない、という印象を持たれる方もいるかも知れません。

そこで、この譬え話をよく見抜き、私たちの信仰生活の中に浸透してくるように、旧約の詩編の言葉と主イエス・キリストの中心的な使信とに照らして読むことにしましょう。

詩編104:27——

彼ら（＝もろもろの被造物）はすべて、あなた（＝主）に望みをおき
（豊作も飢饉もある中で）ときに応じて食べ物をごさるのを待っている。

一見、何気ない詩文ですが、注意深く読み取りましょう。ここには、「主の祈り」にも通じる、信仰の骨子（①と②）がまことに簡潔に示されています。

①もろもろの被造物は主にあつて待ち望んでいる

②ときに応じて彼らの食べ物をごさるのを

詩編104:27は、前後半、二つの部分から成っています。その際、①が先で、②が後であるという順序が大切です。決して②を先にはなりません。だからと言って、②が軽んじられてよいというのではなく、まず①を信仰の中心として、それから②の日常的課題に目を向けなさい、ということです。

罪深い人間の欲得から観るならば、①をすっばかして、②の「食べ物」（＝衣食住・この世の富）に固執するという性向を私たちは持っています（参照：マタイ24:49）。ヘブライ語で エレーハ「あなたに」と オフラム「食べ物を」とが各語のアルファベット4文字中1文字しか違わないのは、何か暗示的です。わずか1文字であっても、神と世の富との隔たりは絶大ですから、取り替えてはなりません。

このように詩編の言葉を捉えるならば、その骨子は、主の祈り・第①部初め「天にまします我らの父

よ。願わくは御名をあげめさせたまえ」、それから第②部初め「我らののを今日も与えたまえ」と全く同様であると分かります。

①の祈りの通りに、神が神であられ、私の命を創り守ってくださるお方と信じるならば、②についての無用な思い煩いから解き放たれることでしょう。

マタイ福音書6:25 主イエスの山上の説教——

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。」

私たちの命の創造者なる神は、私たちの命を養うものとして重要な「食べ物」を「ときに応じて」与えてくださいます。ここでは、主イエスご自身が私たちに、天の父は私たちの思い悩みと労苦とを顧みてくださる、と教えています。

旧約聖書・創世記25章には、罪深い人間の欲得から、神信仰をないがしろにし、自ら神の祝福を放り出してしまった……①の前に②を据えた人物……エサウが登場します。イサクの双子の息子、エサウとヤコブの、兄の方です。エサウのした生き方は、キリスト者への警鐘となっています。

ヘブライ人への手紙12:16-17 キリスト者にふさわしい生活の勧告——

¹⁶ また、だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないよう気をつけるべきです。¹⁷ あなたがたも知っているとおおり、エサウは後になって祝福を受け継ぎたいと願ったが、拒絶されたからです。涙を流して求めたけれども、事態を変えてもらうことができなかつたのです。

それでは、「終わりの時」に向けて目を覚ましている僕の姿、神が「ときに応じて」与えられる食べ物を受け取り、「時間どおり」貧しい人々に給仕する僕の姿を、主イエスの譬え話から捉えましょう。神の時を生きるという点からも、いつも私たち・信仰者は神からの訓練を受けています。

マタイ福音書24:45——

主人がその家の使用人たちの上に立てて、時間どおり彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢いは、いったいだれであろうか。

まことの信仰にはずから行いが伴うという、その一例として「食事を与えさせる」という事が挙げられています。そこには、神に対して「忠実で賢い」ということが、「主にふさわしく振舞っているか」(E.シュヴァイツァー)、または、日常生活において実践されているか、という主イエスの問いかけがあります。

ここで、「忠実で賢い僕」を取り巻く状況を確認しておきましょう。

この僕は、主人のによって「その家の使用人たちの上に立て」られています。「～の上に立つ」という語は、後の47節「管理する」と同じ語です。この語には、「上から下へ下ってそこに据えられる」という意味合いがあります。従って、管理者として威圧的に使用人を支配するのではなく、まさに仕えられるのではなく仕えるかたちで、謙虚に使用人に接する僕だと言えます。「使用人たち」は、「あなたがた(長老たち)にゆだねられている、神の羊の群れ」(ペトロの手紙一 5:2)にほかなりません。

この譬えの登場人物たち、「主人」(キリスト) — 「管理者」(長老・牧師) — 「使用人たち」(会衆) がそこに置かれている、その場所は、「教会」であるということが見通されます。

マタイ福音書24:46——

主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られるは幸いである。

主イエスは、忠実で賢い僕に対する報いを、その最大の喜びを、「幸いである」(マカリオス：ギリシャ語原文では冒頭にあり、46節は感嘆文とみなせる) との一句をもって言い表されました。キリストの

苦しみにあずかる僕は、この世においては理解されず、むしろ不当な扱いや嘲笑をこうむるということを覚悟しなければなりません。その僕にとって、再臨の主と出会うとき、天より地に「幸いなるかな」と鳴りわたる鐘の音が聞こえるであろう、との主イエスの言葉は真の慰めです。ガリラヤ湖畔で「幸いなるかな」と、八つの祝福をもって（マタイ5:3-10）弟子たちに語りかけられた主イエス・キリストの約束ですから、それほど確かなことはありません。なつかしい調べ、「幸いなるかな」という言葉をもって再臨される主イエス・キリストを、私たちは待ち望んでいます。

マタイ福音書24:48-49——

48 しかし、それが悪いで、主人は遅いと思い、49 仲間をり始め、酒飲みどもと一緒に食べたり飲んだりしているとする。

主イエスは丁寧にも、「忠実で賢い僕」とは対極にある「悪い僕」について教えてくださっています。

ここで、「悪い僕」に陥った原因は、主人の留守でした。主人はいずれ帰って来るのです。しかし、自分が主人になってはならないとわきまえながらも、自分を自制することはできませんでした。「食べ物」は、自分の物と思ったのでしょうか。しかも悪いことに、この管理人は、主人気取りの暴飲暴食に、仲間を巻き込んでしまいました。

繰り返しますが、信仰の骨子、①「もろもろの被造物は主にあって待ち望んでいる」と②「ときに応じて彼らの食べ物をくださるのを」（詩編104:27）とにおいて、②が優先され、①が揺らぐとき、神信仰と共に日常生活が崩れていきます。

マタイ福音書24:50-51——

50 もしそうなら、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、51 彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ目に遭わせる。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。

先に、神の時を生きることにおいて、私たちは訓練を受けることが大切だと言いました。しかし、主の再臨という時は、人知を超えた「予想しない日、思いがけない時」であると明言されています。私たちは、その時を、ただ信仰をもって受け止めるしかありません。神の側から出会わせてくださる、主の側から御言葉を聞こえさせてくださるという信仰です。

「彼を厳しく罰し」という「厳しく罰する」という語は、「二つに切る・裂く」という意味で、打たれるほどに「悪い僕」が主人から裁かれるということです。「悪い僕」に対する神による裁きが行われるとき、最終的に「忠実で賢い僕」と「悪い僕」に「二分される」ことに明らかになります。

マタイ福音書の「忠実なと悪い僕」の前後を読むと、救いと裁きとに「二分される」ことが強調されています。

マタイ福音書24:40,41——

そのとき、二人の男/女がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。

マタイ福音書25:2——

そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。

これはもちろん、最後の審判において、救われる人と裁かれる人とは五分五分（半々）であるという予想ではないでしょう。神のさることは、神にゆだねよ、あなたは、ひたすら主イエス・キリストを信じることに集中し、そこから迷い出てはならない、という警告です。自分は、必ず良い方に入るという自信や高慢さが厳に戒められているのです。

さて、旧約の詩編の言葉と主イエス・キリストの中心的な使信とに照らして、今日の譬え話の骨子を見抜き、私たちの信仰生活の中に浸透してくるよう、という趣旨に帰って、説教のまとめをしましょう。

「悪い僕」が給仕するならば、食べ物の提供がるという以上に、食卓の交わりが乱されるというのは、

悲惨なことです。

コリントの信徒への手紙 一 11:21——

なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。

有り余る食べ物を牛耳っている「悪い僕」の陰には、飢え渴いている、貧しい人がいます。

「忠実で賢い僕」、すなわち、信仰者が、下へとへりくだる思いをもって、家族に、教会の兄弟姉妹に、そして、教会の周りの隣人に「仕える」ならば、そこには、整えられた食卓があり（詩編23:5）、主人を中心とする交わりが生まれます。そして、神からの祝福を受け、食べ物を与えられた者は、他の人に分かち与えます。恵みから恵みへと、祝福の輪が広がります。

神は私たちの命をあずかっておられます。そして、神は私たちの命が……体のみならず魂をも……養われるように、食べ物を与えてくださいます。私たちは、命を創り守り、そして、食べ物をくださる神に結び付くことによって、人生そのものが豊かなものとされます。だからこそ、詩編104:27や主の祈りを、神に向かい、兄弟姉妹と声をそろえて唱えるのです。さらに、神が「ときに応じて食べ物をくださる」という信仰が私たちの生活の基となるならば、そこに、いただいたものなのだから、しまずに、他の人と分かち合おうという愛と寛大さが芽生えてくることでしょう。

幸いなことに、私たちは、共同の礼拝において（ということはその恵みが日常生活にまで行き渡るように）、主イエス・キリストを主人とする聖礼典・聖餐を、毎月守っています。

私たちは、主イエス・キリストによって、兄弟姉妹のために、給仕人・奉仕者として立てられています。その真ん中に、主イエスがおられ、兄弟姉妹が囲んでいます。その交わりは、初めの主の晩餐（あるいはその予型の食事）、そして、現在の教会の聖餐、さらに、天の国での祝宴へとつながっていきます。

また、主イエスは、それぞれの人に、いろいろな賜物を与え、奉仕者として立ててくださっています。そうして、互いに仕え合う人々が、霊の働きを通して、一つの体、キリストの体を成しています。主イエスは一つの譬え話を通して、「その家」（マタイ24:45）に、すなわち、教会に「忠実で賢い僕」が立てられていることを教えてくださいました。私たち、皆が「忠実で賢い僕」として召されていることを覚え、聖霊の導きのもとに、この一週間、さまざまな場面で、あるいは、意外な機会に働かせていただくよう祈り求めましょう。